

平成 24 年度第 10 回小学校ゼミナール記録

2013 年 3 月 6 日(木)

於：広島大学附属小学校

参加者：影山和也(広島大学講師), 他 12 名

1. 協議事項

三つのグループに分かれての研究授業の検討及び反省

2. 協議内容

今回は 2 月 8 日・9 日に開催された第 95 回研究発表協議会において行われた「小数のかけ算とわり算」の単元の授業についての検討が行われた。授業は言語活動を通して、余りの小数点が割られる数の小数点に揃えて打つことが分かり、余りのある場合の除法の計算をすることが出来るようになることを目標として、以下のような内容の授業が計画されていた。問題として一問目として

13.5m のテープがあります。2m ずつ切って花かざりを 1 つ作ります。花かざりはいくつできるでしょう。また、テープは何 m あまるでしょう。

を出題し、筆算において小数点を打つ場所を考える場を設定した後で、二問目として

「13.5m のテープがあります。このテープを 2 人で同じ長さになるようにわけます。1 人分の長さは何 m になるでしょう。」

を出題することによって、小数点を打つ意味を視覚的にも比較することが出来るような課題を設定した。授業では一問目を出题した段階で、生徒側から筆算の商が 6 までしか書かないものと、6.75 まで書くものの二パターン出されたため、二問目は出題されなかった。

ここから第 10 回小ゼミにおいて行われた検討内容を述べる。まずは反省点からである。目標に関して、一つの問題から様々な計算方法が生徒から出されたため、それらの計算方法を題材とした言語活動を通して、表現力・判断力をつけることを目標にすれば、より提案性の高い研究授業になったのではないかという議論になった。また、授業者から筆算のそれぞれの数値の意味にこだわるのではなく、問題場面にこだわるのが大事だったことが授業を終えての反省点として挙げられた。更に、割り進める筆算が生徒から出された後、「このような筆算になるような問題を作ってみよう。」と教師が問うと、二問目のような問題を生徒が作り、一問目と二問目の問題文によって筆算方法が異なることがより定着させることが出来たことも反省された。

次に、授業において良かった点や授業によって得られた示唆を述べる。三年生の除法や前時までの割り進める除法を手立てとして、生徒が言語活動することが出来ていた点は非常に良かった点であるという意見が出された。また、得られた示唆として教師側が一方向的にまとめをする必要は決して無く、生徒に議論によって自立的にポイントを見つけさせる授業も大切であることや、内容に関しては筆算の商の 6.75 の内の 0.75 に関しても割合的に考えると余りの一種であることから、割合につながるのではないかという示唆も得られた。

以上が研究授業の検討であったが、授業作りから議論に参加させていただき、様々な勉強をさせていただいたことに対して、算数科の先生方に心から感謝の意を表して、議事録を締めさせていただく。誠に有難うございました。

(文責：福田博人)